

竹取翁物語

首



尾張小川
宜之藏書

竹取翁物語解序



飛驒國高山里田中大秀のち平のまねひの兄弟
那也。その子のまねね。持のいりねふの記。此解
説を記して志すぬ。鈴屋のまねひ子もみね。
於布志らあはらあ。白玉の五百津のまね
ひ。かまへとあへぬら中。まねちはふ皇神の道ふ
まね。言霊ちはふ言の葉の道めまね。おあね
ころろと。紙おら。入る人も於布志る中。

九曜文書

よしあつらめて。人をとれり。後の世よきをしん
おめむ功あり。しち何のしちねのしち思ひも
ふ。京難波伊勢尾張北四國ふ十五六人。三河遠
淡海伊豆甲斐死邪志美濃斐太や七國ふ七人。
出雲石見安藝吉備豊國肥の國筑紫や七國ふ七
人。まへて三十人ふたまはれ。なま何りける。かくあま
あまたの中一人よや思ふ。宇留はしん兄弟
ふねとあつらむ。持のほしめおもしもくはふ。京和

元年四月のはしめ。此人ち平あもやよ伊勢ふまて。
鈴屋大人は言た学の法しきを抜きつらん。教子
の負ふもあまや。まへてこそまおまつれ。あふ
まへて。ゆめもか。わのね。いあて。おてまお
て。よこひねき。ねひひ。しんもふ。ねそのんさし
はまめねるはものね。まへて。いあて。やわおね。ち
こ後。京ふらり。ちあ。か。こふ申。まも。文あ。ねて
おん。これ。京よ。四條のや。あふ。安田植松や。宇

はあれたふかきしるるまじりてさしお給たり。此二人がま
よくはあつゝあすあつゝをいへやひける。おのれを三月に
こゝろよりちとる事にあつて。おふたひてこそえのほろさ
まけれど。かこもておのれらの盛なりしとふた。文のあより
おきつてそつちける。そのうせちと。日毎およもひる
や二度あて。京のみやひをいへはしめて。のち
あひるの國への人。又きつてあつてあつてあつてあ
のほりまひるをいへ。又雲の上人さへ。此やあつてあ

何まゝ所やまぬい入おはしませ。きりせ給ひき。
よみやまゝあるも。萬葉集。源氏のもの終。古語拾遺。
延喜式の祝詞の卷。詠歌大概。玉匣別卷。ちのち
形りけり。こゝろ國へのあつてあつてあつて。京に
をいへるも。よもひるをいへ。あつてあつてあつて。あ
その中あつて。あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

人の好む翁と保められたるよし。保ちて後、おの
ついでふ。植松有伝のおのれふかたりたることとらり
なり。四月十日雙林寺の會ありて、まけの歌閑居
郭公さきり。額山家水なくともよみ。五月廿五日會の
二題。加茂川納涼。嵯峨山松なくともよみ。出づれば
こそ。都日記とよ書よ。思ふにねや。持の保や。お
念え。田中紀文とね。此人の事とね。とさる。ぬ
人もこそ。何れや。此は。よ。この。さ。い。て。ふ。か。く。い。ぬ。お。

けり。翁をね。ね。ね。ね。後。文化元年八月より十月
まで。松坂ふ事な。大ひ。の。家。あ。て。終。屋。に。教。の
書。や。も。と。そ。は。く。か。き。う。つ。と。な。と。せ。ら。れ。ま。な
おのれ。この。紀。の。國。ふ。う。つ。り。ま。い。る。こ。は。さ。い。お。と
や。あ。し。ひ。ま。て。三。は。四。日。松。居。せ。ら。れ。と。ね。と
何。り。き。う。や。と。こ。は。の。学。の。さ。ら。か。あ。あ。ふ。か。さ。ら
ひ。あ。は。し。ける。あ。か。ふ。道。ふ。志。あ。の。た。と。や。い。も。さ。ら
持。の。國。の。惣。社。考。と。ら。ぬ。あ。し。は。と。その。國。の

御社の地を多〜。又その里ちよた荏名神社
のい〜河は〜おは〜まの〜をか〜たこ〜。わあ
を〜子らねのれよか〜ひはありて。御河屋加
はあ〜をあり〜して神河いつたま〜るた由
急よ〜入〜ふさ〜きあせ。又神代正語ふ
つたて。帝紀正訓といふを〜河〜をさ〜や〜思ひ
多ら。土佐日記。た〜河。此竹取の解の河を〜
あ〜おのれよか〜りたのさ〜りた。そを飛驒

た〜よみの屋を〜建むの〜の〜あ〜
免はあ〜あ〜〜あ〜けけ。社よみ文あ
き琴ひた笛たみあわ〜ふ〜よ〜た〜
ろあ〜た〜。高山お里の志を〜。社のや〜
た。京よりち〜あ〜遠た所な〜。田舎を。田中
あ〜あ〜あ〜よ〜。世よひい〜。まねひのち〜
河〜あ〜い〜。世あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
と思ひ河を〜た〜。世あ〜あ〜〜か〜い〜

ゆる隈クニ多く出来オホ感イデしつひをなむ成ゆめ。さふハ此書もこよ
詞をいぬハブキ省略もさほやうウツシキ一寫本ホトは間オチ脱オチふること誤アヤる
處も世々を經るはるに數もろりぬれなるアヤはし。かして先づアヤし小
山の抄アヤみおのアヤいさアヤう思アヤよアヤるアヤ吏アヤどもかアヤつアヤく書アヤ加アヤ一置アヤふりしとい
み一アヤ年は秋越中、國富山人佐脇大彦主訪來トヒキタらアヤるアヤに彼抄見アヤきアヤまアヤるアヤ
樂アヤらアヤるアヤ其猶アヤとアヤしアヤうアヤて見アヤきてアヤよアヤめアヤどアヤそアヤむアヤのアヤしアヤふアヤよ又其のち
訪來アヤらアヤるアヤ江戸人巨勢健冬スリテキもアヤるアヤ板本アヤなるアヤのアヤしアヤ世アヤ子異アヤなるアヤ一巻アヤを持來アヤるアヤ其
よみアヤのアヤまアヤらアヤ互カクミうアヤ言アヤは意アヤにアヤげアヤつアヤひアヤなアヤどアヤ志アヤるアヤ條アヤく辨アヤ得アヤふアヤるアヤと猶
世アヤ子弘アヤく傳アヤへアヤしアヤ此物語アヤをみ見アヤるアヤ人アヤ子示アヤさアヤまアヤほアヤくアヤて一アヤ冊アヤり書
とアヤらアヤるアヤハ文化の九年と云アヤ秋アヤもアヤ其翌年クルトシの春アヤは便アヤに本居アヤ翁アヤの許アヤに

紀伊國アヤも遣ツカさアヤしアヤて見アヤきアヤはアヤるアヤせ又アヤはアヤるアヤ尾張國アヤなるアヤやアヤ物アヤしアヤけるアヤ時
そアヤこアヤれ秦アヤ翁アヤ鈴木アヤ翁アヤもアヤ思オモひアヤし寄ヨリらアヤるアヤもアヤ吏書アヤ加アヤ賜タマらアヤるアヤて見アヤきアヤまアヤるアヤ
らアヤせアヤつアヤもアヤ終アヤど何アヤもアヤ世アヤのアヤしアヤもアヤ得アヤるアヤ書アヤはアヤるアヤ終アヤどアヤりアヤと吾
徒長瀬俊香翁アヤもアヤらアヤるアヤ催モヨホきアヤもアヤ役シタカひアヤ此秋アヤの末アヤより思アヤ起アヤしアヤて猶アヤとアヤ
考正アヤしアヤてかアヤくハ物アヤしアヤるアヤにアヤわアヤるアヤ

文政九年十一月

○ 物語ぶとむ意アヤを

凡スベテそは物語書アヤよアヤらアヤるアヤ所アヤぞアヤもアヤ吾師本居アヤ鈴屋大人アヤの源氏物語アヤの
玉アヤの小櫛アヤといアヤふ書アヤもアヤ甚アヤ委アヤしアヤう云アヤ終アヤりアヤ此ハ物語アヤぶアヤと見アヤるアヤと思アヤふ人
ハ必アヤ不アヤ讀アヤでアヤハアヤえアヤあるアヤ所アヤしアヤけアヤるアヤ今アヤも其片端アヤを取アヤるアヤ此アヤヲ記アヤしアヤつアヤ諸アヤの物

語のきほ各々少づかきものさきまづなれども何きも昔の世に有し更
を談る由も或ハ聊のむら有し更を據として作るもかき或ハ其
名をかきしも替もかき或ハ皆のう作も又稀ハ有しこを
其終に書るも有くやうくぬる中に先多クハ作るもむらなりきて其
何なる趣なる物して何の爲る讀物ぞと云う大方物語を世中より有し何
る善き更惡き更珍き更可笑き更面白き更哀なる更なむむらむらと書
何は其状を繪るもかきまづかきまづして徒然なるほむの慰め
もし世中け有やうも心得る物の哀も知物なりかして何の物語も男
女むらむらひの更宗と多く書るも代は歌集もも戀の歌は
多きと理も人情の深く係る更恋は勝るハ形は連むなりといひ

又ニ^卷物の哀と云更を委し云示る彼物語の殊は何れも筋と論
ひく凡物語も物の哀知づき便なるよしと喻きぬると思へし此物語
は其定も赫映姫の容貌は世にたかくてふむを見くハこちあし
よ苦しむも忘る腹立しきも慰むる形のよきも甚く感はむなり又世
界の男子貴なるも賤も戀慕ける中より疎く心浅き人も益なるは歩行ハと
し無かりけむとて遂に不來なるをぬるを猶いと深く感感とあしも思不
止此女不得てハ世に可在のこと思なりぬる五人の人くは身をい
げにぬしむるハ大方は世の男け切なる念の状を書顯もし物の哀を
令知るもむらむらとさきハ赫映姫ハ甚く感はむ哀さむむらむら
るむハ彼菟原處女、鬢子、櫻子、むらむらハ五人の人くハ身を分方も

たゞ靡^なくばまやうもなうはむはまかひの如くこと見えたる帝の御前
らハ然^サしも情^{ナサキ}なるべ草木にひきて文を通りし今ハとて天の羽衣着^{キル}
時^{トキ}も文を獻^{マケ}てやうも煩^{ワザ}ざし身なる由とてあつと奏^{ウケ}きよむ
げし心なむらハあぬ由とてやうもはむにやうもなうもはむバ此物語も
物み哀知^{アハレ}まきまきとてひやうもはむバ其意もて讀味^{ヨミ}べき書^{カキ}まやうもはむ

◎ 書名

此物語の名具^{ツチ}らハ多^タのけりけおきぬの物語と云はく省^シハ竹取の物
か^カゆり^リと云も難^ナし此翁^{コノオノ}をさしてやう竹取とのと云こ^モ主水^{モモトリタケノキ}帯^{オビ}乃^ノお
ど云同格なり此物語の中も多^タなりとけともしハ大和物語も竹
取^{トケ}のよと泣^{ナク}つと歌^{ウタ}ももめりとて多^タ計^{ケイ}登理^{トウリ}と云はき^キの又^{マタ}多^タ迦^カ

登理^{トウリ}と呼ぶまことと云論あり六百番歌合の俊成卿は判^ハり云く竹取翁の
更^{マシ}らふ^ラけハ両様^{リウサマ}もなうべ^ベ然^シ而^シ此翁^{コノオノ}もりてさうと云こと
け^ケ證^シ據^コぞ有^アへま^マ顯^シ昭^シ陳^シ狀^シい^イま^マ万葉集竹取翁の更^{マシ}らふ^ラとあり
け^ケや^ヤり^リ兩説^{リウセツ}なり万葉も両点^{リウテン}とて堀河院百首懷舊の題^イ中納言師
時^{トキ}卿^ノの歌^{ウタ}も春^{ハル}虫^{ムシ}も登^{ノボ}て見^ミらふ^ラとありけりの子^コ等^トも更^{マシ}とてお
も^モとよ^トま^マは^ハては^ハま^マ堀河院の御前^{ミマエ}も今^{イマ}講^{コウ}哥^カも彼^{カノ}人^{ヒト}もふ^フとありとよ
ま^マは^ハて^テ別^{ワケ}の難^ナも聞^キは^ハは^ハ其^シ説^{セツ}も附^ツて詠^{エイ}ぎ^キもよ^ヨし申^{マシ}らふ^ラけ^ケと
ハ詞^{コト}を^ヲり^リま^マ彼^{カノ}卿^ノの歌^{ウタ}も證^シ拠^コも聞^キは^ハ又^{マタ}論^{ロン}敵^{テキ}もえ出^デさ^サは^ハは^ハ証^シ拠^コ
如^ニ只^シ今^{イマ}ハ勝^{カチ}鞭^ヒを^ヲま^マは^ハは^ハ証^シ拠^コも聞^キは^ハ又^{マタ}論^{ロン}敵^{テキ}もえ出^デさ^サは^ハは^ハ証^シ拠^コ
を^ヲ尋^ヒら^ラは^ハは^ハ証^シ拠^コも聞^キは^ハ又^{マタ}論^{ロン}敵^{テキ}もえ出^デさ^サは^ハは^ハ証^シ拠^コ

紀ソノステシ其アラヒニ所ニ乘竹刀終成竹林故号彼地曰竹屋テ又遂登長屋之竹島タカシマニも又
竹葉瀨タカハセ名是等と思へど竹何と云はまもれも多加と云るの古の正訓な
ふべし譬へど酒も下サテまゐるゝハ一夜酒サテとひ上サテま置サテるハ酒槽酒蟻サカブネサカキサと云
の如し仙覺万葉抄もタカトリと點きりもくも此物語も彼万葉の
翁の名より出るりと見ればバ古風を存して多加登理と喚べくことと
云ふ大秀按ヨシまふるりもふけりやも云べく聞ゆる中ヨシ多計登理
と喚ヨシび宜ヨシるばま先此類ヒの言第四音と第一音ヨシ子轉カクして下ヨシにけく格
竹クテ菅金舟稻風雨酒目天食アンタなどふるむふるやふるしまふるむふるむ
なふるむるりすぐるりすぐるりかた山いな穂ふな屋形かど祭マツルのよとぶ
ことさるばまのやうな竹タチのむすげの緒ユと皆中間ヨシの之字ヨシの

意ヨシなり取トリハもひりかとりりの類ヒ又ヨシふらたまのりみ佩守ヨシも同じ
是等ハ中間ヨシの之字ヨシのばまあへび又今世ヨシの言ヨシかもの金掘人ヨシをわの
ほり稻苅人ヨシをいひのことと云たご業ヨシを名ヨシとふる皆第一音ヨシ子不轉ヨシを以
思へど多加登理ヨシと云はるゝハ又天ヨシハあめ某ヨシ何ヨシの某ヨシ何ヨシの某ヨシ何ヨシ
某ヨシといひ食ヨシハ豊受姫ヨシやよもの姫宇賀ヨシの魂ヨシのけもちの神と種ヨシもも云
又高津宮ヨシ子御宇天皇ヨシの御製ヨシるハやめね一本管ヨシハ子もやび立ヨシの何ヨシまな
まあへど須賀波良ヨシと云るゝ須賀波良ヨシといはめ何ヨシへど須賀志賣ヨシと一
首の内ヨシの言ヨシと交ヨシて須賀ヨシも須賀ヨシも製ヨシれつと契冲阿圍ヨシ黎ヨシの云く竹取
と名付ヨシるゝハ万葉ヨシ六ヨシ昔有老翁ヨシ號曰竹取翁也ヨシ云この竹取ヨシハふるり
や訓ヨシを昔ヨシハふるり訓ヨシにふるり是ヨシを本ヨシとして名附ヨシつゝし顯昭六

審ツカ信ツキミのふくこ思オモふゆ

◎ 作ぬし

此物語の作者は河海抄の作者と云ふも、凡そ古き物語書ども作者の
とゞけざるはなし。河海抄は竹取翁の古き物語なり作者不知とあるを
此抄は古人の傳説より源順主の所作と云ふと河海抄とをばるなり。此
書の唐土天竺のゆかり博聞強記なりて、いさぐち造得べきと思ふ
るは、若し順主ともあると云ふ人など、在けを聞僻キキガめ、次は
順主の作るなりと云觸し、猥言も有べき。宇都保物語を河海抄の源
順作平有疑と記さるるも、猶此物語も宇都保も順主なりぬ
よしハ落凹トコも此主の作るなりと云ふ就ハ落凹物語解の論みきの皆區ツキ

區クは文射フシヤコト異なるも同人は所ツカ為ナリぬ、論をよびて、明らるるも分
るる更スごの昌憲チヤウケン云々河海抄は巨勢相覧一説云、巨勢金岡相覧同人
也、但ト如高名録者相覧猶先代人也、金岡仁明天皇御時人也、承和四年九
月五日圖御所繪と云、花鳥餘情に巨勢相覧者金岡之子、金岡寛平時
人為其子則可為貫之同時人、とあり、大秀云相覧主の更何きも、後、
ふれ、人なるべし承和四丁巳より寛平元年巳酉あゝ五十三年なり、貫之
主齒の更二説ありて詳なり、紛々古今目錄より、元慶元出生して寛
平元年ハ十三歳なり又一説ハ元慶ハの生と云、然、弄花抄云、金岡
ハ相覧主と金岡主の子と云、大氏同時に當るべし、
子、除目成文抄ハ昌泰二年二月除目執筆時平公讚岐少目從八位下巨
勢朝臣相覧畫師、是ハ寛平元より十一年、順の作なり、ハ相覧貫之なりと
の書ふり、と云、昌泰延喜の比既ハ舊し物語なるを相覧貫

之の書しりしと云ふべし抄頭云々

○ 梶の思

此物語ハ唐土天竺の書ども奇しく珍らなる更共を集取て作り
始て寶樓閣經より得るを得たりといふハ云々は書月宮殿の更
ハ其經なる思へしと云々と本居翁の許を見を參らせしは赫映姫
ハ始終ある石の鉢、火鼠の裘、珠の枝など唐土天竺の物名もなれど彼
所の書に拠ると云ふことをなれど此の故更も此彼似付る
る更も有ぬべし。抑赫映姫ハ竹中より現出せし天に昇りて更なる
今世こそ傳へし諸國の風土記なるも能似よれる更も有しなる
べし其不傳こそと云ふは纒子遺書の中にも山城風土記の加茂大

神の始終ある古事記、書紀、万葉集なども是に似る更多ぞといふと云
遣はるる解の中より書入るる故更は言長きとも抜出さず此卷は
未だ載つるにや

○ 凡例

此の物語の出来をいふも皇國言を其言の俣より一言も
いふに假字に書記せる凡の書籍の中にも甚く古き物も
有るをいふに寫し傳ふ世に程々ハ詞をもかき漏し文字をも寫誤
せる甚多ぞといふ清少納言の御許は枕冊子にも物語こそいふ書は
すまじらひのひちやく作者さといふはははは定本はよめど書
附るる甚くも物語の出来を甚くも遠くの當時すら如此

といふも幾百年を歴にふ未世を也。大秀おもふも古代の書籍と云
その巻物も冊子も誤るハ書改る更易の事あるを誤るも脱くるも
さて置つても多かりけり。ハ巻物を紙を長く継ぎて置かば
誤る時中も一葉抜棄る更も煩く又冊子と云物も今世に如く
帛の端の方にてやむ。ハ板取の煩わしさを古ハ厚き紙を中めて
今俗ムサウ一葉の表裏に書こめば強しやりの事聊なる誤な
トギとつよ。とも直し漏るる字などを傍に書加ふ事も見苦し
知ぬ兒もて大方ハさて過しつるより世々あるものに其いと多
く成も
来よけり。有る。凡そ字形の似る。或ハ音通。或ハ書字の誤
る。例ども玉小櫛。和云。まじり。ざること
又按も今も物書写す。試も脱くる更も多し。非ぬ更を書添る更も
をさ

とて無もねなる。されどむけの無と。ハあ。ハ讀継み。り。衍と見
削去。こ。能く心を用べき。更も有る。如此ま。今世に至る。ハ正し
き本。な。け。唯。一。ハ定難き態。し。何。此度も得る。本の限集へ
置。彼。よ。是。よ。け。打。傾。先。多。ハ同本の多。ハ方。は。書
本。と。板本。と。中。ハ。板本。ハ。方。を。憑。剛。覺。板本。よ。と。又。い。や
覺。も。な。も。強。同類の多。も。後難くて聊も勝る。と思。役。い。又
彼。も。是。も。脱。き。と。誤。り。と。見。も。ハ。止。更。不。得。自。己。の。心。も。て。補。も。除。も
改。も。ち。つ。ハ。無。負。氣。も。思。よ。れ。も。思。よ。れ。も。捨。や。で。ち。ん。凡。そ
異本に役るも己の私も補も除も改もちつるハ悉皆本文に印を附て
解。彼。に。よ。り。是。も。役。と。さ。る。も。た。よ。て。委。細。も。斷。あ。り。其。本

を探^カ返^カ返^カ疾^カ返^カしつば^カく^カな^カま^カと^カ終^カと^カ辨^カの^カ格^カま^カら^カひ^カく^カ決^カ誤^カと見
ゆるハ然^カこ^カや^カも^カぬ^カも有^カてし

○諸本は異同ありて改^カる^カる^カ傍^カの^カ点^カを^カつ^カ○私^カに^カ補^カひ^カ改^カつ
る^カハ^カ点^カを^カは^カく^カ○衍^カまり^カと見^カて^カ削^カ除^カつ^カハ其^カ由^カ委^カし^カ解^カり
と^カゆ^カり^カ○言^カ重^カなり^カて^カ衍^カら^カ見^カゆ^カ物^カの^カ猶^カえ^カし^カも不^カ除^カて本
は^カ終^カる^カハ左^カ傍^カの^カ点^カを^カと^カる^カ○誤^カ字^カの^カ見^カな^カぐ^カ猶^カ改^カ難^カく^カて
斯^カも^カあ^カる^カ思^カは^カる^カハ傍^カに^カ假^カ字^カも^カて訓^カを^カあ^カる^カとあ^カる^カる^カむ
○脱^カ文^カと見^カえ^カる^カ補^カつ^カハ行^カ中^カの^カ脱^カと^カき^カる^カし^カつ

今改正を^カて^カて^カ校^カは^カる^カ本^カハ小山^カ氏^カの^カ抄^カ普^カ世^カ行^カる^カ板^カ本^カと始
り^カて^カ佐^カ野^カ春^カ樹^カと^カる^カ人^カは^カ寛^カ政^カ十^カ二^カ年^カに^カ校^カ合^カる^カ本^カ是^カハ寫^カ本^カの^カ橋

本^カ稻^カ彦^カより^カ御^カ園^カ常^カ言^カと^カる^カ人^カの^カ寫^カ傳^カる^カ本^カなり^カ其^カを^カ古^カき^カ寫^カ本^カと本^カ行
と^カして^カ安^カ永^カ二^カ年^カ武^カ村^カ美^カ伎^カの^カ古^カ寫^カ本^カ林^カ鮒^カ主^カの^カ古^カ寫^カ本^カ上^カ田^カ百^カ樹^カの^カ平^カ信^カ之^カ
を^カ校^カ合^カる^カ本^カ又^カ活^カ板^カ本^カなど^カ悉^カく^カ書^カ入^カる^カ本^カなり^カ又^カ健^カ冬^カの^カ越^カ中^カ高^カ岡^カの^カ
て^カ得^カる^カり^カて^カ賚^カる^カり^カけ^カる^カ甚^カ古^カき^カ板^カ本^カの^カよ^カり^カて^カ多^カの^カと^カ
十一^カ行^カの^カ奥^カ書^カ年^カ記^カ等^カなり^カ此^カ本^カ健^カ冬^カ死^カす^カ又^カ羣^カ書^カ類^カ從^カり^カ本^カ又^カ文^カ政^カ四^カ年^カ
後^カ津^カ國^カ西^カ宮^カ中^カ川^カ惟^カ幾^カは^カめ^カへ^カ持^カる^カり^カと^カぞ^カ又^カ文^カ政^カ四^カ年^カ
は^カ春^カ難^カ波^カり^カて^カ得^カる^カ一^カ寫^カ本^カなど^カを^カ能^カ考^カ按^カ定^カる^カ取^カる^カ本^カ文^カと^カなり^カし^カつ

○抄本と云ハ小山^カ氏^カの^カ抄^カの^カ本^カ文^カなり^カ是^カハ大^カ氏^カ普^カ通^カ板^カ本^カと^カ同^カし^カと
は^カ絶^カる^カ無^カく^カあ^カる^カ其^カを^カ○普^カ本^カと^カ記^カして^カ分^カつ^カ○寫^カ本
と^カ云^カる^カ佐^カ野^カ春^カ樹^カの^カ寫^カ本^カは^カ本^カ行^カなり^カ○古^カ本^カハ^カ鮒^カ主^カの^カ本^カなり^カ○校
本^カと^カる^カ百^カ樹^カの^カ本^カなり^カ○活^カ本^カハ^カ活^カ板^カの^カ本^カなり^カ是^カ等^カ寫^カ本^カの^カ傍^カに^カ某

某記しるるを取はるなりと○古板本とて健冬の本なり○類本とて
群書類後奥書右以織部正乘尹主藏本なり○一本とて浪花了
得る本なり○譬へど抄本と写本と同じき類ハ其憑びよき方
一本を擧ぐ悉く不云

○内題も無も有も何り抄本古板本も無し凡物語文日記なり類ひ
あるは〜書い〜の大方を無しと終て外題の〜内〜の題と不
書べき事なり写本も内ハ竹やりの翁ハ物語と題き今ハ是を取
外題〜の普本も〜の物語と何と竹取の〜不云〜を惡し凡て
伊勢の物語、まほは物語、なごやうの字と讀付べし枕冊子も何やし
らゐれもの〜のやうなや〜知〜翁と云字ハ畧〜

あし〜ぬよしハ上より〜

○河社も契冲阿闍梨ハ隨筆なり其一の巻は末ハ此物語の更と記され
るは皆是ハ取と〜○竹取物語抄二冊浪花人小山藤原儀天明の
初〜病の間ハ著き〜齡廿五〜身まうけ〜由其昆弟入江
昌憲の序ハ見〜若〜漢籍佛書〜引出〜才賢のりけ
〜推量〜甚〜惜人なり〜其頭書ハ即昌憲の説なりと
是も序ハ記き〜是〜に引〜書ハ説も用ある〜皆〜河社ハ云
或ハ細書ハ抄ハ引〜又頭書抄の〜に云〜記〜出書ち〜ハ不
記〜何と○又師説〜其本書ハ讓〜委〜不云も多〜記傳と云
るハ古事記傳なり○日本書紀ハ神武紀、仁德紀、〜云〜其天皇の御卷

なり。又宇津保物語、源氏物語、榮花物語、など卷の名何る物ハ源氏の宇都保のれどハ不記るに明石卷、吹上卷、などとも。一は是らハ卷名ども能人の知る紛らぬ程なり。又枕冊子ハのなと記せるハ北村季吟翁の春曙抄より引出せるなり。源氏も湖月抄も後葉の次第をさし。○凡そ詔イシク曰イハレ、白イハレ、などある文を訓るハ先姑イハレ子詔曰白とよきて其云云の語終り又再とのりぬふとらととあはれになど云辭を訓付る古語の格ある古事記天、忍穂耳命詔之豊葦原之水穗國者伊多久佐夜藝豆有祁理告而ある出雲國造神賀詞乃大穴持命乃申給久云申テ天古今集に親王云けり狩して天の川原至と云く詔をよきて盃をさせし云り終る。土左日記攝取取け云や黒き鳥のゆくに白き浪を

よれとらり。玉蔓卷此男を召しりかいしる思さまに成ならじ心の勢ひをかくるはげを更などかかりしはなど何りと師記傳卷一いを終り。此物語を此格多くて赫映姫のままと云くのままも翁いく云くとららなど何るを後の物語共にハ此格稀く上のるまはいと云言なくて某君云くのまま某云くとららなど見もかく上の阿るハ詔云申給久申久云久語久云やかいしる更ハなど云格あるを此物語は乃ま云くらいしる云くあはれ云くなどを多し是ハ下へけ續き甚聞苦し此餘の物語ハ甚稀なり。落凹物語三三条家に從ひ女君ハ申給ふ人乃よ死せせると此十九日子從ら女君いく云くとららなど又卷四帥四君を迎むる更と勸めるるのらら罷下るはげき程甚近し

云日ハハハ十餘日ヤなんぬとのしまへを。總角卷子姫君宇治大君思煩
 辨の参るにのしまふ。年頃も人よ不似ニヌ薰君の御心よせとのここのしま
 ひ續ツ々々々々。是らハ甚稀なる。更那方。かく此書ものしまへい
 はくハ多々のしまふいふと。方ハ少ぢし。又いふと一本は何をも又一
 本ハハいハと何類ハも多かり。強シく按シて是ハ申ハ云ハと字も書
 ると假字ヲ写ハひと記ハす。いふと書つる誤の翁と五人の人々とい
 詞ものしまへと有べきといへを。申ハさバと云ハまともいへを。なぬぬも
 さる。あつ。こつ。猶よつ。考へし。

○此書ハとやうハ先本文を幾度もかへて讀ハかま。次ハ附録の古更
 と其段ハかへて其解を見。言ハは意とせり。文の趣を知。故今心

得安ウのハまのカ鳥ノ假ナ名目ヲ設ケ九段ヲゆウちツるハやウ

卷一 ○ 赫映姫おひさるち

○ 妻いひ

卷二 ○ 佛の御石お鉢

○ 蓬萊お玉の枝

卷三 ○ 火鼠の裘

○ 龍の首お珠

卷四 ○ 燕お子安貝

○ 御狩の行幸

卷五 ○ 天の羽衣

是ハるが見安のうむ爲ましく物しつゝ元來かくある更ハハと思ひ
そ。さ終ハ手よかくかき人なりた此本文を取美麗しくかきまてせ
む始より終まで一連の書續はて先の段ハ一行の半は終りとも次の
段の始を改頭より上ハ書べのうむ受き終と今改ふる印などハ附
おくはしきて凡く解ふこと云物ハ其段中も又條々分て註釈かよ
隔て文詞はくうむ終ハ大旨ハ得るうむ終ハ今も本文をのりハ書出
おるし終と書の甚拙ハ取今度ハえものもひやむ

竹取翁物語解附録

此卷ハ此物語ハ似よりゆる古更ハ解ハ引出づ更ハ
言のうて漏しつゝも記しきよまや

田中大秀 撰

◎ 竹中よ人を得るふ

廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經序品ハいそ。爾時衆中有金剛手菩薩摩
訶薩頂禮釋迦牟尼如來合掌恭敬白佛言世尊今此塔中諸如來等從何而
有從何而來佛言汝今諦聽當爲汝說乃往古昔不可思議無量無數阿僧祇
劫此贍部洲中多諸人衆安穩豐樂五穀不種自然成熟人無彼我亦無積貯
當此之時無有佛名有一大山名寶山王彼寶山中有三仙人一名寶髻二名

金髻三名金剛髻彼三仙人繫心專念佛法僧寶復作是念我等何時證無上
正覺度脫一切諸衆生等時彼仙衆作是念已須臾默念復起前念由是念故
卽證慈悲歡喜一切衆生種々樓閣三摩地獲於天眼觀彼上方見淨居天復
於空中有聲言曰善哉正士善哉正士能發上願求大正覺汝曾聞不有大妙
法名廣大寶樓閣祕密善住陀羅尼往昔如來已曾演說善爲利益一切衆生
諸有聞者決定不退無上正覺此陀羅尼有如是等無量無邊不可思議力
時彼仙人得法歡喜欣慶踊躍於其住處如新醍醐消沒於地卽於沒處而生
三竹七寶爲根金莖葉竿梢枝之上皆有眞珠香潔殊勝常有光明往來見者
靡不欣悅生滿十月便自裂破一一竹內各生一童子顏貌端正色相成就時
三童子亦既生已各於竹下結跏趺坐入諸禪定至第七日於其夜中皆成正

覺其身金色三十二相八十種好圓光嚴飾時彼三竹一一變成高妙樓閣

○此經今ハ菩提流支三藏の譯も黄檗山本と出づ河社より引ま
ゝるハ不空三藏の譯も弘法大師の將來ら終るなり少し異な
れども大抵ハ同じ廣大寶樓閣祕密善住陀羅尼の功德と説る經也
又契沖阿闍黎の云く經くハ男子なると女子なりちして是を本
據として竹取物語ハ書出さるると云はれ實ハ然なるべしこれ經
今ハ取出て讀誦せしむるを等持院殿三十三回忌明德元年
四月法華八講の記もは乃御法と云書ハ仙洞御所より宝樓閣
經ハ橘の打枝ハ郭公と添させぬひく今日ハ御法ハ手向よしよ
し何り當時ハ廣く讀し經なるべし

華陽國志。有竹王者。興遼水。先是有女子浣于水濱。有三大竹流入。足間推之。不去。聞竹中有兒聲。持歸。破竹。得男。長有武。支。遂雄。夷狄以竹為姓。植。死。破竹于野。遂成林。今王祠竹林是也。

○河社。ハ。後漢書。西南夷傳。なる。夜郎。の傳。と引。と。り。夜郎。者。初。有。女子。浣。於。澗。水。有。三。節。大。竹。流。入。足。間。聞。其。中。有。號。聲。剖。竹。視。之。得。一。男。兒。歸。養。之。及。長。有。武。自。立。為。夜。郎。侯。以。竹。為。姓。と。り。ハ。只。聊。の。異。な。こ。必。同。人。な。の。べ。

幽怪錄。邨延。長史。有。大。竹。凌。雲。可。三。尺。圍。伐。之。見。內。有。二。仙。翁。相。對。曰。平。生。深。根。勁。節。惜。為。主。人。死。伐。言。畢。乘。雲。而。去。續。志。

○是ハ赫夜姫の升天も同じ右抄より引。

釋氏要覽。甘蔗氏經云。昔有轉輪王名。太自在。子孫相承。合有八方四千。王最後。王名。大茅草。垂老。无子。乃委政。大臣。自剃髮。出家。衆號。王僊。極老。不能行履。諸弟子。輩。時。行。乞。食。遂。以。草。籠。盛。王。僊。懸。於。樹。虞。虎。狼。之。害。也。有。獵。人。望。見。謂。是。白。鳥。乃。射。之。死。血。瀝。干。地。諸。弟。子。歸。見。師。被。害。即。共。殯。尸。其。血。瀝。之。地。後。時。忽。生。甘。蔗。二。本。日。久。崩。剖。一。生。童。子。一。生。童。女。太。臣。聞。迎。取。歸。宮。養。育。長。成。以。王。種。故。遂。立。為。王。命。氏。甘。蔗。始。也。と。あ。ハ。寶。樓。閣。經。了。似。ふ。り。

○下學集。甘蔗。顧愷。之。每。食。蔗。自。尾。至。本。曰。漸。入。佳。境。又。曰。釋。迦。為。甘。蔗。氏。也。よ。本。草。和。名。子。甘。蔗。之。夜。反。陶。景。注。曰。取。汁。為。沙。糖。菽。蔗。揚。玄。操。音。狄。七。卷。一。名。諸。柘。一。名。軒。堵。上。音。干。下。音。柘。已。唐。頭。注。子。按。医。心。食。性。云。和。名。久。美。と。何。り。佛。說。柰。女。眷。域。因。緣。經。後。漢。安。世。高。譯。に。い。く。如。是。我。聞。一。時。佛。在。羅。闍。祇。國。云。坐。

中有一比丘尼名曰柰女即從座起整服作禮長跪叉手白佛言世尊我自念
先世生波羅柰國為貧女人時世有佛名曰迦葉時與大眾圍遶說法坐聞經
歡喜意欲布施願無所有自惟貧賤心用悲感詣他園圍求乞果蔬當以施佛
時得一柰大而香好擊一盂水并柰一枚奉迦葉佛及諸眾僧佛知至意呪願
受之分布水柰一切周普緣此福祚壽盡生天得為天后下生世間不由胞胎
九十一劫生柰華中端正鮮潔常識宿命今值世尊開示道眼柰女禮已還
坐以上耆婆經佛在世時羅耶黎國羅字耆婆經國王苑中自然生一柰樹枝
葉繁茂實又加大既有九色香美非凡王寶愛此柰果字自非中宮宮中尊貴
美人不得啖噉此柰果國中有梵志居士上摩財富無數一國無雙又聰明博達
大智超群王重愛之用為大臣請梵志飯食食一字畢以一柰實與之梵志

見柰香美非凡乃問王曰此柰樹下寧有小栽可得乞不王曰大多小栽吾恐
妨其大樹輒除去之卿若欲得今當相與即以一柰栽與梵志梵志得歸種之
朝夕澆灌日日長大枝條茂好三年生實光彩大小如王家柰梵志大喜自念
我家貧賤無數不減於王惟无此柰以為不如今已得之為无減王既乃取
食之而大苦澀了不可食梵志更大愁惱乃退思惟當是土无肥潤故耳乃捉
取百牛之漣乳以飲一牛復取一牛漣煎之之字為醍醐以灌柰根日日灌
之乃至明年實乃甘美如王家柰而樹邊忽復生一瘤節大如手拳日日增長
梵志心念忽有此瘤節恐妨其實適欲所去恐復復恐傷樹連日思惟遲徊未
決而節中忽生一枝正指上向洪直調好高出樹頭去地七丈其抄乃分作諸
枝周圍傍出形如偃蓋葉茂好勝於本樹梵志怪之不知枝上當何所有乃

作棧閣登而視之見技上偃蓋之中乃有池水既清且香又有衆華彩色鮮明
披視華中下有一女兒在池華水中梵志抱取歸長養之名曰柰女至年
十五顏色端正天下无雙宣聞遠國有七國王同時俱來詣梵志所求婢柰女
以爲夫人梵志大恐怖不知當以與誰乃於園中架一高樓以柰女著上出謂
諸王曰此女字非我所生自出於柰樹之上亦字不知是天龍鬼神女耶鬼魅
之物今七王俱來求之我設與一王六王當怒不敢愛惜女今在園中樓上諸
王便共字自平二字議有應得者便自取去非我所制也於是七王口共爭
之紛紜未決至其夕夜萍沙王從伏竇中入登樓就之共宿明晨當去柰女
白曰大王幸枉威尊接遠近於我今復相捨而去若其有子則是王種當何
所與付王曰若是男兒當以還我若是女兒便以與汝王則即脫手金銀

之印以付柰女以是爲信便出語群臣言我已得柰女與共一宿亦无奇異
故如凡人故不取耳萍沙軍中皆稱萬歲曰我王已得柰女六王聞之便各還
去萍沙王去後遂便有娠時柰女勅守門人言若有求見我者當語言我病後
日月滿生一男兒顏貌端正兒生則手持針藥囊梵志曰此國王之子而執醫
器必醫王也云名曰老域云加云八歲云父王之所到云德文尸羅
王樹云得云後外照內見人腹臟云病云瘥云業云得云ふり

○柰女香婆經と題し云も後漢安世高の譯云も文を省略云も聊
字の替云も云趣意云も異云も更云も因緣經云も耆域云も
と名曰香婆云も何云も此經云も物語云も似云も處多云も○緣云も此福祚盡云も生
天得爲天后下生世間不由胞胎云も何云も赫映姬天女云も云の今此土

子生るる不由胞胎ニ似るル○披視テ華中ニ有一女兒ニ在池華中ニ梵志
抱取テ歸長養ス之ヲ何レ竹取翁竹中ニ女兒ヲ得テ家ニ歸リ養育ス
ふニ同シ○奈女ノ顔色端正ニ天下ニ无ク雙ヲ宣フ聞ク遠國ニ有テ七國ノ王ノ同時ニ俱來テ詣テ
梵志ノ所求ム娉ム奈女ニハ五人ノ人ノ赫映ノ姬ヲ得テ之ヲ養育ス夫レ狀ヲ乃チ
○梵志ノ謂フ諸王ニ曰ク此非ズ我所ニ生ルと云フるニ竹取ヲと喚出シ女ヲ我ニ賜フ
伏拜シ手ヲ摺シ宣フるニ自レ己ノ不レ生子ナルハ心ノも不レ令レ墮ル也ト
何レと云フてと云フるニ同シ○自レ出テ於テ奈樹ノ之上ニハ造麻呂ノ手ニ今レ生ル
るニ子ヲもくニ非ズ昔山ノより見付ルるニ子ヲもくニ信スと云フ○不知テ天
龍鬼神ノ女ノ耶鬼魅ノ之物ト云フと變化ノの人ト申スるニ同シ意ヲぞト云フ
○今レ七王ノ俱來テ求ム之ハ五人ノ人ノの志ハひとレの志ハなりト云フるニ似ルるニ

○我設與ニ一王ニ六王ノ當怒ルハハひレりレくニ逢フるニ似ルるニ云フるニ是レと
反ス々々々々ノ如シ又未キ

又奈女生時國中復有須曼女及波曇女亦同時俱生須曼女者生於須曼華
中國有加羅越家常ニ須曼ヲ以テ爲ス香膏ト骨石邊ニ忽ニ作テ瘤節ト大如彈丸ニ日日長
大至如手拳ト便卒ニ破レ見ユ石節ノ之中ニ有テ聚聚ト如螢火ト射出墮地ニ三日
而生須曼又三日成華華舒中有小女兒加羅越取養之名曰須曼女長大姝
好及才明智慧ト奈女爾ト此ノ時ニ又有梵志家浴池中自然生青蓮華ト特
加大ニ日日長益ト如五斗瓶華舒中見ル有テ女兒梵志取養之名ト曰ク波
曇女長大又好才明智慧如須曼女諸國王聞此二女顔容絕世交來求娉之
二女曰我生不由胞胎乃出草華之中是與凡人不同何レ宜ニ當ニ隨ニ世人ニ乃

○書紀乃垂仁卷云。都怒我阿羅斯等。其妻ハ異傳云。其件の詞。其神石化。美麗童女。靈異記卷下。女人産生石。以之爲神。而齋縁。第卅一。條に。美乃國方縣郡水野郷楠見村。有一女人。姓縣氏也。年迄于卅有餘歲。不嫁。未通。而身懷妊。怪之。三年山部。天皇世。延曆元年。关东春二月下旬。産生二石。方丈五寸。一色青白斑。一色專青。每年增長。有比郡名曰淳見。是郡部内有大神名曰伊奈婆託。卜者言其産二石。是我子。因其女家内立忌籬。而齋往古今。未都見。聞是。爲我聖朝奇異事。猶此神の御妻在野册。子記しつるを可考。ハ彼天日矛の赤玉に似たり。

山城風土記。賀茂建角身命娶舟波國神野神伊可古夜日女生子名玉依日子。次曰玉依日賣。玉依日賣於石川瀬見。小川遊爲時。舟塗矢自川上流下。

乃取排置床邊。遂孕生男子。至成人時。外祖父建角身命造八尋屋。豎八戸扉。釀八腹酒。而神集。而七日七夜樂遊。然與子語言。汝父將思人。令飲此酒。即舉酒。坏向天爲祭。分穿屋。竟而升於天。乃因外祖父之名。号可茂別雷命。所謂舟塗矢者。乙訓郡社坐火雷命在。

○釋日本紀云。賀茂別雷命。父舟塗矢。乙訓坐火雷神社是也。亦秦氏大赤帳者。戸上矢者。松尾大明神是也。松尾大明神者。大山咋神。用鳴鑼水以上用字以下誤字あるべし記。傳十二子載。按風土記。向天爲祭。字ハ矢字と寫誤。燬。

古事記中卷。白檮原宮段に更求爲大后之美人時。大久米命曰。此間有媛女。是謂神御子。其所以謂神御子者。三嶋湟咋之女名勢夜陀多良比賣。其容姿麗。

美故美和之大物主神見感而其美人爲大便之時化丹塗矢自其爲大便之
溝流下突其美人之富登尔其美人驚而立走伊須岐伎乃將來其矢置於
床邊忽成麗壯夫即娶其美人生子名謂富登多良伊須岐比賣命亦名
謂比賣多良伊須氣余理比賣故是以謂神御子也

○古史記なる風土記と丹塗矢の男子化形は不同狀なり又風土
記ハ赫映姫の天子升るも同一類なり

萬葉集卷三

仙柘枝歌三首

霞零吉志美我高嶺乎險跡草取可奈和妹手乎取
入まらむらむら今ハ
本の終りまらむら

右一首或云吉野人味稻與柘枝仙媛歌也但見柘枝傳無有此歌
此暮柘之左枝乃流來者梁者不打而不取香聞將有

右一首

古尔梁打人乃無有世伐此間毛有益柘之枝羽裳

右一首若宮年魚麻呂作

懷風藻

贈正一位太政大臣藤原朝臣史 五言遊吉野

飛文山水地命爵薛蘿中漆姬控鶴舉柘媛接莫通煙光巖上翠日影濬前
紅翻知玄圃近對翫入松風

太宰大貳正四位下紀朝臣男人 七言遊吉野川

万丈崇巖削成秀千尋素濤逆折流欲訪鍾池越潭跡留連美稻逢槎洲

從三位中納言丹墀真人廣成 五言遊吉野山

山水隨臨賞巖谿望新朝著度峰翼夕翫躍潭鱗放曠多幽趣超然少俗塵
栖心佳野域尋向美稻津著疑者誤

七言吉野之作

高嶺嵯峨多奇勢長河渺漫作迴流鍾地超潭豈凡類美稻逢仙月冰洲

○猶此仙女の更ハ次ニ載ル仁明天皇四十御賀の歌ももゝあり。慥
なる傳は有らむと今ハ失はひつゝもや。万葉集の解も古へ吉野は
里の女仙と成て在しが同所ニ味稻と云男川ニ梁打魚と云其
仙女柘枝と化し流來て其梁に留よりぬ男と云と取て置し麗し

女となりしと愛て相住けり云更なりと云。玉依比賣丹塗矢と

取床の邊に置けり云似るり○柘ツミハ和名抄に毛詩注云桑柘シヤ射

漢語抄 蠶シヤ死食也 云豆立美

書紀雄略卷五のく大泊瀬天皇二十二年秋七月丹波國餘佐郡管川人

水江浦嶋子乘舟而釣遂得大龜便化為女於曼浦嶋子感以為婦相逐入海

到蓬萊山歷觀仙衆語在別卷

續後紀卷第十九仁明天皇嘉祥二年三月庚辰興福寺大法師等為奉賀

天皇寶算滿于四十云更作天人下拾芥子天衣羅拂石翻擊御藥俱來祇候

及浦嶋子暫昇雲漢而得長生吉野女眇通上天而來去等像副之長歌奉獻

其長歌詞曰日本乃野馬臺能國遠何云帝之御世萬代介重祿飾早奉令

榮度拓之枝乃由求禮佛許願成志多大海乃白浪崩且常世嶋國成建天
到住美聞見人波萬世能壽遠倍延津故事余云語來留澄江能淵余釣世皇之
民浦嶋子加天女釣良來且紫雲泛引且片時余將且飛往天是曾此乃常世
之國度語良比且七日經志加無限久命有志此嶋余許有介良三吉野余有志
態志祢天女來通且其後波蒙譴天毗禮衣著且飛尔支云是亦此之嶋根乃
人余許有岐那云禮

○紀の文う浦嶋子暫昇雲漢而得長生ととて歌の龜姫を天女釣ら
從來とととめ傳みると○万葉の左注の味稻詩の美稻と書
るるハ宇万志祢と訓べきと此哥ハ熊志祢とよめと又此仙女後
に天み升しの文ハ吉野女眇通上天而來且去とつハ哥ハひ終衣著

く飛去きと云と有り

丹後國風土記釋紀に云く與謝郡与射郡本丹波和銅六年割日置里本
量集解改作置和名抄引此里有筒川村此人夫日下部首等先祖名云筒川嶋
子為人姿容秀美風流无類斯所謂水江浦嶋子者也是舊宰伊類部馬養連
所記无相乖故略陳所由之旨長谷朝倉宮御宇天皇御世嶋子獨乘小船汎
出海中為釣經三日三夜不得一魚乃得五色龜心思奇異置于船中即寐忽
為婦人其容美麗更不可比嶋子問曰人宅遙遠海庭人之詎人忽來女娘
咲對曰風流之士獨汎蒼海不勝近談就風雲來嶋子復問曰風雲何處來女
答曰天上仙家之人也請君勿疑乘相談之愛爰嶋子知神女慎懼疑心女娘
語曰賤妾之意共天地畢俱日月極但君奈何早先許不之意嶋子答曰更无

死言何觸乎女娘曰君宜迴掉赴于蓬山嶼子從往女娘教令眠目即不意之間至海中博大之嶋其地如敷玉廟臺臙腴樓堂玲瓏目所不見耳所不聞携手徐行到一大宅之門女娘曰君且立此處開門入內即七豎子來相語曰是龜比賣之夫也亦八豎子來相語曰是龜比賣之夫也茲知女娘之名龜比賣乃女娘出來嶼子語豎子等更女娘曰其七豎子者昴星也其八豎子者畢星也君莫恠焉即立前引導進入于內女娘父母共相迎揖定座于斯稱說人間仙都之別談議人神偶會之嘉乃雲百品芳味兄弟姊妹等舉坏獻酬隣里幼女等紅顏戲接仙哥寡亮神儂凌危其為歡宴萬倍人間於茲不知日暮但黃昏之時群仙侶等漸々退散即女娘獨留雙眉接袖成夫婦之理于時嶼子遺舊俗遊仙都既經三歲忽起懷土之心獨戀二親故吟哀繁發嗟歎日益女娘

問曰此來觀君夫之貞異於常時願聞其志嶼子對曰古人言少人懷土死狐首岳僕以虛談今斯信然也女娘問曰君欲歸乎嶼子答曰僕近離親故之俗遠入神仙之堺不忍戀眷輒申輕慮所望還本俗奉拜二親女娘拭淚歎曰意等金石共期萬歲何眷鄉里棄遺一時即相携徘徊相談慟哀遂接袂退去就于歧路於是女娘父母親族俱悲別送之女娘取玉匣授嶼子謂曰君終不遺賤妾有眷尋者堅握匣慎莫開見即相分乘船仍教令眠目忽到本土筒川鄉即瞻眺村邑人物遷易更无死由爰問鄉人曰水江浦嶼子之家人今在何處鄉人答曰君何處人問舊遠人乎吾聞古老等相傳曰先世有水江浦嶼子獨遊蒼海復不還來今經三百餘歲者何忽問此乎即銜弃心雖迴鄉里不會一親既送旬日乃撫玉匣而感恩神女於嶼子忘前日期忽開玉匣即未瞻之

間芳蘭之體率于風雲翮飛蒼夫嶼子即班遠期要還知復難會迴首踟躕
淚徘徊于斯拭淚哥曰

等許余弊尔久母多智和多留美頭能睿能宇良志麻能古賀計等母知多
留弊字本う弊と作るを今改久字父に誤まり下皆同し
春ハ睿字と誤まり結句誤脱ありく讀得べし

又神女遙飛芳音哥曰

夜麻等弊尔加是布企阿義天久母婆奈禮所企遠理等母與和遠和須良

スナ第四句の與字後人の加つる結句良の下須字と脱まり此哥古
奈更記高津宮段は天皇吉備國は行幸し時黒日賣の獻哥あり其は
ハ第二句尔斯布岐阿宜且結
句和礼和須礼米夜と何也

嶼子更不勝戀望哥曰

古良尔古非阿佐刀遠比良企和我遠礼波等許與能波麻能奈美能遠等

企許由遠等の遠字假
字格ふのへ

後時人追加哥曰

美頭能睿能宇良志麻能古我多麻久志義阿氣受阿理世波麻多母阿波
麻志

等許與幣尔久母多知和多留多由女久女波都賀未等和礼曾加奈志企
第三第四句誤字
脱字あり讀え

○始の歌拭淚哥曰と河までも嶼子の歌とを聞え必後人の作な
る。大和物語の津國は處女墓の段は其男女は代々人々歌よ
めふ同類なり。○本朝神仙傳釋紀卷十二右の傳は次み引と
大底同様なり文と約く記よりみハ逢
入問之曰漸過百年よ浦島子傳類從百三十
五の卷に載ハ不値七世之孫

云々續浦島子傳記類後ハ古老口傳而經數百歲傳來語曰云々
寫本の後紀ハ淳和天皇天長二年今歲浦島子歸郷雄略天皇御宇
入海至今三百四十七年也云々何リ書紀通證ハ谷響集曰舍人親王
撰日本紀者在養老八年先天皇二年者過一百歲焉是知云天長二年
者得非不替之失乎本朝神仙傳云百年而歸此說爲是云と云云云々
万葉集卷九ハ詠水江浦島子歌一首并短歌を載ふり是等大同小異
あゝ其歌ハ墨吉之岸尔出居而釣船之得乎良布手湯多布の見者古
之事曾所念水江之浦島兒之云々浦島子傳ハ忽至故郷澄江浦と
あると神仙傳ハ水江浦人也とあるハ誤の攝翁云墨吉ハ與謝郡ハ
も在なるべし水江ハ氏ハ墨吉ハ異なりと云云云々大秀按に

風土記ハ日下部首等先祖とあるを思へば水江ハ死謂字なりとある
廣博物志未本書を見れば抄ハ引ふるを云々モロコシ唐土の義興と云ふ所ハ吳堪と云
人在り若くは縣の吏となり其の家ハ荆溪と云川ハ近あり或時
其河邊より大なる螺を得り取り歸り家に置るるに急に美麗き女
ハ化ぬ吳堪よろこび云々已の妻として住り人名は云々螺婦といふ縣
は云々是を聞て彼女を思ひいふもして得きと思ひ吳堪を呼ぶ云々
う世ハ蝦蟆毛と云物あなり其捉來て云々汝の妻ハ參らせよと
責徵セウハク子吳堪家に歸り云々愁ウレふハ螺婦が云々其ハ甚易き更ヤスみこ
そとく大なる蝦蟆毛生しと捉來て與へつ悦ウレかかると許イカリす奉
けさバ守れ云々此度ハ鬼の臂と乞ぬ吳堪其妻ハ談合カケラフハ是も易き

更々速々取來ぬ守是を見らに誠々懼々鬼の臂なりと見つ斯世の
物と云ふ從ひも來れぬ守せしうの思煩々此度の聞も
おのづか物とと思ふ詞を聞分ぢるやうの禍斗をもてこと云け
る家に歸る又云ふ如何に為すしと如何なる物ぞと問へば
螺婦云く遠き國の獸なりと云く是をも須叟の間取來つ守此獸を
見らる唯尋常は犬の異更ぬし禍斗といふて云く云バ答く申さく
此獸ハ火を食物として火の尿を送けり云バ守さるばる火を令食
みさぬの食暫く火の尿を放り其火頻々燃着るは屋
ども焼く焼く守け一家の人とも皆悉焼死るもされぬ螺婦ハ天女
の類のことと語傳しと云ふ

○螺婦のこゝを龜姫に似たり又世に云ふ此物語に似たり

扶桑略記卷第廿二 残缺第 六册 善家秘記云余寛平五年出爲備中介時有賀
夜郡人賀陽良藤者頗有貨殖以錢爲備前少目至于寛平八年秩罷居住本
郷葦守其妻淫奔入京良藤鰥居於一室忽覺心神狂亂獨居執筆調吟和歌
如有挑女通書之狀或時有與女兒通殷懃之辭然而不見其形如此數十日
一朝俄失良藤所在舉家尋求遂無相遇良藤兄大領豐仲弟統領豐蔭吉備
津彦神官祢宜豐恒及良藤男左兵衛志忠貞等皆豪富之人也皆謂良藤狂
悖自捨其身悲哽懊惱求其屍所在然猶無遇俱發願云若得良藤死骸當造
十一面觀世音菩薩像即伐栢樹與良藤形軀長短相等向之頂礼誓願如此
十二日良藤自其宅藏下出來顔色憔悴如病黃瘡者又其藏无柱唯石上居

折、く、下、去、地、纔、四、五、寸、曾、不、可、容、身、而、良、藤、心、情、醒、寤、話、云、鰥、居、日、久、心、中、常、
念、與、女、通、接、於、是、女、兒、一、人、以、書、著、菊、華、云、公、主、有、愛、念、主、人、之、情、故、奉、書、通、
慇、懃、即、開、書、讀、之、艷、詞、佳、美、心、情、搖、蕩、如、此、往、反、數、度、書、中、有、和、歌、誦、唱、和、彼、
遂、以、飭、車、迎、之、騎、馬、先、導、者、四、人、行、數、十、里、許、至、一、宮、門、老、太、夫、一、人、迎、門、云、
僕、此、公、主、家、令、也、公、主、令、僕、引、丈、人、於、是、從、家、令、入、門、屏、間、其、殿、屋、帷、帳、綺、飭、
甚、美、須、臾、薦、珍、饌、未、盡、備、日、暮、即、入、燕、寢、終、成、懷、好、意、愛、纏、密、雖、死、無、恹、晝、則、
同、寢、夜、則、併、枕、比、翼、連、理、猶、如、踈、隔、遂、生、一、男、兒、聰、悟、狀、貌、美、麗、朝、夕、抱、持、
未、嘗、離、膝、下、常、念、改、長、男、忠、貞、為、庶、子、以、此、兒、為、嫡、子、此、為、其、母、之、貴、也、居、三、
个、年、忽、有、優、婆、塞、持、杖、直、昇、公、主、殿、上、侍、人、男、女、皆、盡、逃、散、公、主、又、隱、不、見、優、
婆、塞、以、杖、突、我、背、令、出、狹、隘、之、間、顧、而、視、之、此、我、家、藏、折、下、也、於、是、家、中、大、小、

大、怪、即、毀、藏、而、視、之、狐、數、十、散、走、入、山、藏、下、猶、有、良、藤、座、臥、之、處、良、藤、居、藏、下、
纔、十、三、个、日、也、而、今、謂、三、年、又、藏、折、下、纔、四、五、寸、而、今、良、藤、知、高、門、縮、形、出、入、
其、中、又、以、藏、下、令、如、大、殿、帷、帳、皆、靈、狐、之、妖、惑、也、又、優、婆、塞、者、此、觀、音、之、變、身、
也、太、悲、之、力、脫、此、邪、妖、而、已、其、後、良、藤、無、恙、十、餘、年、六、十、一、死、之、何、り

○浦嶋子の龜姫を誘ならせては仙宮に入しと此良藤の狐を通接と
相似るり嶋子ハ百年と三年と思ひ良藤ハ十三日と三年と思つと
長キと短し仙短キと長き妖仙術と妖惑と共ニ奇怪シきミとミやミやミ
○猶靈異記上卷第三条子尾張國阿育知郡片菟里の農父ハ前ニ墮ルる雷小兒ト成シこと
元興寺道場法又同卷第二条美濃國大野郡の人狐ハ
女子化ましと妻とせし更ならば何と今ハ畧つ

◎ 妻何くそむ

古事記上に故此大國主神之兄弟八十神坐ミアノオト其八十神各有欲誓稻羽之八上比賣之心共行稻羽時於大穴牟遲神負帛為從者率往キ段コ於是八上比賣答八十神言吾者不聞汝等之言將嫁大穴牟遲神故尔八十神怒欲殺大穴牟遲神共議而至伯伎國之手間山本赤猪の叟又根堅故其八上比賣者如先期美刀阿多波志都

同記中故其天之日矛持渡來物者玉津寶云而珠二貫又振浪比礼切浪比礼振風比礼切風比礼又奥津鏡邊津鏡并八種也此者伊豆志之八前大神也故茲神之女名伊豆志表登賣神坐也故八十神雖欲得是伊豆志表登賣皆不得婚於是有一神兄號秋山之下水壯夫弟名春山之霞壯夫故其兄

謂其弟吾雖乞伊豆志表登賣不得婚汝得此孀子乎答曰易得也尔其兄曰若汝有得此孀子者避上下衣服量身高而釀雞酒亦山河之物悉備設為宇礼豆玖云尔尔其弟如兄言具白其母即其母取布遲葛而一宿之間織縫衣禪及襪沓亦作弓矢令服其衣禪等令取其弓矢遣其孀子之家者其衣服及弓矢悉成藤花於是其春山之霞壯夫以其弓矢繫孀子之廁尔伊豆志表登賣思異其花將來之時立其孀子之後入其屋即婚故生一子也尔白其兄曰吾者得伊豆志表登賣於是其兄慷慨弟之婚以不償其宇礼豆玖之物尔愁白其母之時御祖答曰我御世之事能許曾神習又宇都志岐青人草習乎不償其物恨其兄子乃取其伊豆志河之河嶋之節竹而作八目之荒籠取其河石合鹽而裹其竹葉令詛言如此竹葉青如此竹葉萎而青萎又如鹽之盈

乾而盈乾又如此石之沈而沈臥如此令詛置於烟上是以其兄八年之間于
萎病枯故其兄患泣請其御祖者即令返詛戶於是其身如本以安平也

○伊豆志表登賣ハ伊豆志大神の女とあるを思へども是も彼八種に
玉津寶の男も化々令産みへるも彼丹塗矢ある天日矛の玉など
の同様なる來由も有しなるは是ハ明宮段の末に載るも終りも甚
上代は更なるは

同記下 伊波礼之癡栗宮段ハ意富祁命表祁命播磨國より宮の上より
事を記して次ハ故天下をらしめむとす間に平群臣の祖名ハ志毘
臣歌垣ハ立々表祁命はをむす美人の手をとけり其嬢子ハ菟田
首等の女名ハ大魚と云は表祁命ハ歌垣ハ立々歌ひけり

潮瀬の波折を見れば遊々縮の鱗手ハ妻をり見お
是ハ志毘臣をりひり

大宮はをり縮手すかおりり
かく歌ひ其歌の末をり時ハ表祁命をりひり

於るるをり縮手すかおりり
余ハ歌ひけり

おろきをり心をゆみ臣は子のハ重ハ柴垣入るるあ
余志毘臣をり愈々歌ひけり

大君のこをりをり八節をり結もをりまは柴垣やけり
むの記

尔王子まゝ歌ひもまほく

おふをよし鮪大魚つゝ海人よ、其あはれは、あはれしけむ鮪つゝもひ

如此うカヒアカつひカヒアカ闘明して何其けすぬは、めく意富祁命表祁命ニをし

を議カガもまひく凡スベく朝廷の人どもハ旦トシもを朝廷に参り晝ハ志毘の門子

は、ふか後今を志毘必い孫カミもむ其門人もなむ故今なむべハ謀

難カタくまゝと謀り即軍を與カミて志毘臣の家を圍トリ殺トリむまひき

○師の古事記傳卷四 十三云く抑上件哥垣ヨミカハに贈答し賜へる哥ども此

記書紀共の傳の紛モモけ誤りを見く或ハ作者易ヨニスシカハ或ハ次第乱ツイデき或

を脱オボシふるも所念オボシきなど穩ヨシなるも更共の互ヨシもろを今能考正サガせむ

くしては、思巡らして心の及サガへる限ハ云はれども猶サガ慥サガよと決サガめ

難き更共も何をも猶サガよく考サガへき更なりと云はれ、今ハ其次第を改

まはせしむるも從カ+て假字カ+を書つゝるも

萬葉集卷第一に中大兄命三山御歌

高山波雲根火雄男志等耳梨與相諍競伎神代從如此尔有良之古昔母

然尔有許曾虚蟬毛孀乎相搭良思吉

反歌

高山與耳梨山與相之時立見尔來之伊奈美國波良

○此大御歌ハ天智天皇太子ミコよおほしきまゝ時播磨國イテに幸イテまゝして

神集カムジンてふ所ソコもて其處ココの故更コトを聞キしめ、作ユミひくもなり其古事ハ

播磨風土記フナトに、出雲國阿菩大神アホノカミ、大和國畝火香山耳梨三山相闘ウツヒノカガヤミ、ミナシ以

此詞諫山欲諫止の上來之時到此處乃聞止覆其所乘之船而坐之
故号神集之覆形と云々

同集卷第九子詠勝鹿真間娘子歌一首并短歌

鷄鳴吾妻乃國尔古昔尔有家留事登至今不絕言來勝牡鹿乃真間乃手
兒奈我麻衣尔青衿著直佐麻乎裳者織服而髮谷母搔者不抗履乎谷不
著雖行錦綾之中丹裹有齋兒毛妹尔將及哉望月之滿有面輪二如花咲
而立有者夏蟲乃入火之如水門入尔船已具如久歸香具禮人乃言時幾
時毛不生物乎何為跡歟身乎多名知而浪音乃驟湊之奧津城尔妹之臥
勢流遠代尔有家類事乎昨日霜將見我其登毛所念可母

反歌

勝牡鹿之真間之并見者立平之水挹家年手兒名之所念

○猶此更とよえ卷三子山部赤人け長歌短歌首あゝ卷十四子下

總歌二首

同集卷第十六子昔者有娘子字曰櫻兒也于時有二壯士共誣此娘而指生
格競貪死相敵於是娘子歎曰從古來于今未聞未見一女之身往適二門
矣方今壯士之意有難和平不如妾死相害永息尔乃尋入林中懸樹經死其
兩壯士不敢哀慟血泣漣襟各陳心緒作歌二首

春去者挿頭尔將為跡我念之櫻花者散去流香去下家字を
妹之名尔繫有櫻花所者常哉將戀弥年之羽尔

はゝ同卷子或曰昔有三男同甥一女也娘子嘆息曰一女之身易滅如露三

雄之志難平如石遂乃彷徨池上沈沒水底於時其壯士等不勝哀類之至各

陳所心作歌三首 娘子字曰

無耳之池羊蹄恨之吾妹兒之來乍潛者水波將涸

足曳之山縵之兒今日往跡吾尔告世還來麻之乎 還ハ迅の誤

足曳之山縵之兒如今日何隈乎見管來尔監

○手兒名櫻兒縵兒を戀する男の多き赫映姫に似たり

大和物語 百册 昔津國にすむ女阿多と其をよびふ男二人を愛有け

ふ一人も其國に住男姓ハ菟原にあり今一人も和泉國の人なり

姓ハ茅沼とあり云々かくて其男も年齢顔形人おるど唯

同じ計なりぬる志の勝らぬと逢めと思ふ心差のほど唯同

やなり暮終ハ諸共來阿の物遣ハ唯同やとみかハ何を勝終

と云はれぬもあは女思煩ひぬ此人に心さしハ疎なるハ何れも

逢すしれぬも是も彼も月日を経る家の門に立ち萬志を見けしと

志さひぬ是よりも彼よりも同やに於る物ども取も不入と色

に持てるなり親阿りかく見苦し年月を歴て人の歎といふつに

負もいさほしひりく逢ハ今一人の思ハ絶ちんと云ハ此も

さおちも人の志は同やとちも思煩ひぬささばいこのす度

に云ハ當時生田川のほとり帯を打くるよけりかか其を其よのり人

どもを喚よやとて親ハ云や誰も御心さしの同やとちハ此を其

よめちなる思煩ひとては今日何よよ終此妻を定てん或ハ遠き所よ

まじりし人あり或ハ此コなるの其イカキ勞かきりあし是も彼もいさかしま
態なりと云時其甚かしく悦ウレひあつと申さんと思オモひあつと云ハ此川
に浮ウてはる水鳥と射イふも其を射中イコチせし人みよめと云むと云
時其甚よに更なりと云く射るわざ一人ハ頭の方を射つ今一人ハ尾
の方を射つ其時つねと云はるも何れも女思メカふと云む

住スむびぬ我身なげてむ津の國は生田の川ハ名のこなりけるよとよみ
く此ひるぐりハ川ものどひてあふりけきハはづりと落入るぐり親オヤ
とて騒ウまのいゝ間マハ此よふ男二人やぐり同所ドウジョハ落入ぬ一人ハ足
をとと一人ハ手をとと死シぐり其時親オヤいと騒ウく取上る泣ナの
のいゝと葬ナる男どもは親も來キまけと此女の塚ツツは傍ナリよ又塚ども造ツクリ

掘埋ウま時津國の男は親云や同國の男とて同死ドウシるはきとて國
の人みいゝて此國ハ土を侵ウびへきと云く妨サマる時和泉の方ハみや
和泉國の土と舟フネ運ハく此よもて來キるなむ遂ツに埋ウけりまはる女メの墓ツツ
とど中ナカて左右サウヤウになん男の墓ツツども今イマ在アるかふ更マども昔ムカシ在アけ
るツツ繪エ子コ皆みなの故コト后キミ官ノミヤ奉ホウげせむ是コト上ウを皆みな人ヒトハ此コノ人ヒトハ代カりよみ
ける伊勢の御息所

影カゲとて水ミヅの下シタへ何ナニの足アシとてあまのいゝかひなうりなま
女メ成ナるまひく女メ一ヒトの宮ミヤ
限リミなくふく沈シヅめ我魂ミタマをうけし人ヒト見ミえ受ウむは
又マタとや

しづこころの魂タマをよもぎとまきあはれしこねあひかゝるとも思ほえたる

兵衛の命婦

はるけきも諸ともうとど契けるあゆみ人を見えぬ物の

糸所のこゝろ

勝負もたかくてやとてむ君より思ふ山いこも

いきなりしむりぬ女よなるとて

逢くはわづらふなよ竹の立見ゆと聞ぞかたし

又人

身を投ぐはるき人よちきし縁どうに身ハ水よかたをなると

又今ひとりぬ男よなるとて

おなじ江に住ハしゆし手中ちまきぬ我とけと契らむりけ

かゝる女

うらりけ我となると大うハかゝる契のなるとも

又一人の男よなるとて

我とけとちきしゆしゆし江に住ハ嬉しまみぎととも思ふ

○此故吏とよめる万葉集卷九に過葦屋處女墓時作歌一首并短歌

二首并三 見菟原處女墓歌一首并短歌 二首并五丁 卷十九に大

伴家持卿の追和處女墓歌一首并短歌有り古く語傳ゆる更々今

も猶其墓有りとも卷九の上は長歌古之益荒丁子各競妻向為祁

年云下なる子虚木綿乃窄而座在者見而師香跡悒憤時之垣廬成人

之誑時ノトキ、ハシ何り。此物語子帳の内より出さば、赫映姫を得てし
の形見てしハシ何り。不離君ハシもち夜を明し日と暮す人多る
に、其中ニ猶云けるを五人ハシ何るに似る。此大和文ハシハ此更
を略り、此長哥ハシにも生田川の水鳥を射し、ハシハ宗申ハシ呂黄
泉尔ハシ將待跡、血沼壯士、其夜夢見取次寸追去、ハシハ
處女の死、後ハシ壯士も慕行し、ハシハ卷十九ハシなるに離家海邊ハシ尔出立
節間ハシ毛惜命ハシ平露霜之過麻之尔家礼、ハシハ海ハシ身ハシを投ハシくこと
死ハシつめ、ハシハ水鳥ハシの更ハシハ後ハシ面白ハシく作加ハシる物語なるべし。此
女身ハシを投ハシくことよめる歌も古き調ハシあり、ハシハ伊勢ハシの御ハシなり、ハシハ彼
男女ハシの意ハシも成ハシてよハシめ、ハシハ如ハシく後人ハシは追加ハシるなるべし。

萬葉集卷第九ノ詠上ノ總末ノ珠名ノ娘子ノ一首ハシ并短歌

水長ハシ鳥安ハシ房尔ハシ繼有ハシ梓弓ハシ末乃ハシ珠名ハシ者胸別ハシ之廣ハシ吾妹ハシ腰細ハシ之須輕ハシ娘子ハシ之
其姿ハシ之端正ハシ尔如花ハシ咲而立ハシ者玉梓ハシ乃道行人ハシ者ハシ已行ハシ道者ハシ不去ハシ而ハシ不召ハシ尔
門ハシ至奴ハシ指並隣ハシ之君者ハシ預ハシ已妻離ハシ而不ハシ乞尔ハシ銚ハシ左倍奉ハシ人乃皆ハシ如是ハシ迷有ハシ者
容艷ハシ縁而曾妹ハシ者多波礼ハシ互有家留ハシ

反歌

金門ハシ尔之人ハシ乃來立ハシ者夜中ハシ母身者ハシ田菜不知ハシ出曾相來ハシ

○是等ハシはるるハシの猶多ハシうハシはどはぶハシまの

◎佛の御石鉢

並ハシ囉經ハシ西晉ハシ竺ハシ法護ハシ法護ハシ卷第七上鉢品ハシ曰く尔時ハシ提謂波利ハシ之等ハシ与賈人ハシ俱ハシ五百ハシ為

召於時樹木華實茂盛演佛定意七日不動不搖時有梵天厥名識乾住于梵天見佛新得道快坐七日未有獻食者我當求人令飯上佛即使五百賈人皆躡不行識乾先世五百賈人之知識也欲度之故故使然矣提謂波利驚怖而還與衆共議諸天即時而說偈言

如來成佛道 所願已具足 汝等貢上食 因是轉法輪

時五百人詣樹神所梵作神現光像分明言今世有佛在拘留國界尼連禪水邊未有致食者汝曹幸先能有善意必獲大福賈人聞佛名皆大喜言佛必獨大尊天神所敬非凡品也即和麩密俱於樹下稽首上佛佛念先古諸佛哀受人施法皆持鉢不宜如餘道人手受食也時四天王於頻那山上得四枚青石之鉢欲於中食時有天子名曰照明謂四王曰今者有佛名釋迦文應用斯鉢

非人之器今當受食可往奉之於是四王即與天子華香妓樂幡蓋并鉢如屈臂頃俱下詣佛四天王各取所持之鉢共貢上佛佛念取一不快餘人意當悉納之提頭賴王先以獻佛佛即受之而為說偈言

今投世尊器 當獲尊法器 自得寂然鉢 心意无忘失

時毘留勒王次復奉鉢佛即受之而為說偈言

若投如來器 其心未曾忘 四天王安護 乃至清淨覺

時毘留羅又王次復奉鉢佛尋受之而說偈言

其施清淨器 淨心投如來 身心常輕便 天龍神所歎

時毘沙門王次復奉鉢佛即受之而說偈言

佛戒无缺漏 授完牢之器 信施无乱心 使德无缺減

佛受鉢已累左手、中右手按上、即合成一、令四際現而復歎曰

吾前世施鉢、故有身果報、今獲斯四器、四王神足致

佛歎偈已、即以其鉢受賈、妙密咒願、文、と何とゆ、大品般若經卷第一奉鉢

品、佛告舍利弗、若菩薩摩訶薩行般若波羅密、能作是功德、是時四天王皆

大歡喜、意念言我等當以四鉢奉菩薩如前、天王奉先佛鉢、とあると大智

度論卷第三十五、釋して云く、四天王奉鉢四鉢、義如先說、問曰佛、一身何

以受四鉢、答曰四王力等、不可偏受一人、又令見佛、神力合四鉢、為一心喜信

淨作是念、我等從菩薩、初生至今成佛、所修供養功德不虛、文、と何り

○是ハ專念寺了恩法橋了問しるぐ抄出く示さ終り

○龍の珠とりの吏

大平廣記の奇傳を引く曰く、貞元中周耶買奴善入水、如履平地、多探水底、
金銀寶玉、號曰水精、訪相州刺史王澤州北八角井、且暮煙雲、霧鬱漫衍、晦夜、
有光如火、相傳金龍潛其底、澤曰此當有至寶、但無計究之、耶乃命水精、水精、
忻然脫衣沈之、良久而出、曰黃龍鱗如金、抱數顆明珠、熟寐得一利劍、當斬之、
澤取寶劍與之水精、仗劍而入、忽見水精自井面躍出、續有金手長數百丈、爪、
甲鋒穎自空掣攫水精、却入井去、節、録、よ、梁四公記、洞庭山洞穴、梁武問杰、
公公曰此穴通枯桑島、東岸東海龍王女掌珠藏、龍畏蠟、愛美玉及空青、而嗜、
燕若遣使可得宝珠、於是洛黎縣羅子春請使、乃求茅君、所遺龍腦香於陶弘、
景以干闥美玉造一小函、宣州空青汰其精者、以蠟塗子春身、齎燒燕五百枚、
入洞穴、至龍宮、獻龍女、龍女食之大嘉、以太珠三小珠七雜、一石報之、杰公曰

五年春解纜とありて紀子不合とて上子論ゆるが如し。承和三年五月難波を船出しくかゝりて五年の秋中まると唐岸より着る終るまひの當時海路は安うござりし更車持皇子はまると大伴大納言み青反吐わらひあまひと

七年夏歸本朝路遭狂飈

六年八月己巳ハの十七丁 勅太宰太貳從四位上南淵朝臣永河等得今月十四日飛驒死奏遣唐錄事大神宗雄送太宰府牒狀知大唐三箇船嫌本船之不完倩駕楚州新羅船九隻傍新羅南以歸朝其第六船宗雄死駕是也餘八箇船或隱或見前後相失未有到着艱虞之變不可不備宜每方面戌防人不絕炬火羸貯糧水令後著船共得安穩癸酉十八上奏入唐大使

藤原朝臣常嗣等歸着之由云甲戌勅云得今月十九日奏狀知遣唐大使藤原朝臣常嗣等率七隻船迴著肥前國松浦郡生属嶋与先到錄事大神宗雄船捻是八艘宜依例勞來式寬旅思又未到第二船并一隻船復能覘候來輒奏聞

漂落南海風浪緊急鼓船艫俄而雷電霹靂桅子摧破天晝黑暗失路東西須臾寄著一島不知何島島有賊類傷害數人捉成殊祈願佛神儻得全濟與判官良岑長松等合力即採集破船杖木造一船共載尔時便風引船得著此岸七年三月癸丑九の八丁上奏云四月庚申九丁勅云得今月八日飛驒奏狀知遣唐知乘船事菅原握成等分駕一隻小船迴著大隅國海畔捉成等漂入異域万死更生久言苦節誠可矜恤乞入都依舊勞來量賜布帛以資衣裳

又准判官良岑長松所駕之船全否未期鬱陶于懷宜諭戒邊面無絕候伺
若有來者俾得安穩ハ何り文德紀ハ何り握成長松等合力造一船得着
此岸ハ何りを違へハいハ

南海の一島に漂着て鬪戦ハハ六月己酉十八遣唐第二船知乘
船事正六位上菅原朝臣梶成等海中遇逆風漂着南海賊地相戦之時去承
和六年八月三日より十餘日の所得兵器五尺鉾一枚片蓋鞘横佩一柄
箭一雙賈來獻之並不似中國兵仗ハ

三代實錄卷十一ハ清和天皇貞觀七年十月廿六日雅樂權大允外從
五位下和途宿祢大田麻呂者右京人也吹笛出身備於伶官始師更雅
樂權小屬外從五位下良枝宿祢清上受學吹笛清上時善吹笛音律調

弄皆窮其妙見大田麻呂有氣骨可勵習因加意而教之承和之初清上
役聘唐使入大唐歸朝之日船遭逆風漂隨南海賊地為賊所殺本姓大
戸首河内國人大田麻呂能受其道ハあり其の藤原貞敏遣唐准
判官承和二年十月庚寅任あく琵琶と傳り歸ら終しと
六年十月己酉天皇御
紫震殿ハ令貞敏彈比
巴ハ何り清上も笛を傳りて入唐きハ終り受幸れて此災
子遇ハ惜むハ悲むハ

其時神の御助ありハ更ハ七月己亥九の廿奉授出羽國飽海郡正五位
下勳五等大物忌神從四位下餘如故兼宛神封二戸詔曰 天皇 我 詔旨
坐大物忌大神ハ申賜ハ須皇朝ハ縁有物恠天ト詢ハ大神為崇賜倍利
加以遣唐使第二船人等迴來申去去年八月ハ南賊境ハ漂落ハ相戰時

よ彼白雲と差て射放こころなり斯く雷なり地震なり雨風をけし
御社の内も甚く震動て濱邊ハ沙を吹ふて目口閉てく阿らぬ
を念じてひひら射放つ態をする更晝夜をいへ津輕城へ七
里餘も隔るは其響をいへみまらりて斯て二三日あして
晴をいへ五七日も不止更あり漸く雨風をきまり空霽をりり常
の状をなれば皆退こころ其跡を彼鏃石多く墮るを身の守り
かき拾ひてけり此濱一里餘も廣さハ三里餘の地も草木も小石
もなく甚白く米粉の如き細砂のとなり其御神ハ大物忌大神と申
ぬりて此法師ハ出羽人なり其更よく知く語ぬ
當時くあり
今ハ南海賊地
も落る苦しむ人も無らばハ不用なる神軍のやうなりあはれ
神御稜威を示して外國の賊を防ぎし神心なりおもしろくして如斯

世に奇しく妙なる神更を今
に行ひぬるを有らぬ
誠を靈異し更なれば握成主の傳は
因に委するしつ

此神社ハ神名式子出羽國飽海郡大物忌神社名神大小物忌神社とあり

貞觀四年十一月乙丑朔詔出羽國正四位上勲五等大物忌神預官社

とて猶増位のこと正史に載らるなり

朝廷嘉其誠節十年爲鍼博士次爲侍醫卒於官とんぬる此更を語傳
るはこの人南海を甚く恐懼し地と思居るなりけり

◎ 男きりし人

書紀卷第七大足彦忍代別景行天皇四年春二月甲寅朔甲子天皇幸美濃
左右奏言之茲國有佳人曰弟媛谷姿端正八坂入彦皇子之女也天皇欲得

爲妃章弟媛之家弟媛聞乘輿車駕則隱竹林於是天皇權令弟媛至而居于
泳宮鯉魚浮池朝夕臨視而戲遊時弟媛欲見其鯉魚遊而密來臨池天皇則
留而通之爰弟媛以爲夫婦之道古今違則也然於吾而不便則請天皇曰妾
性不欲交接之道今不勝皇命之威暫納帷幕之中然意所不快亦形姿穢陋
久之不堪陪於掖庭唯有妾姓名曰八坂入媛容姿麗美志亦貞潔宜納後宮
天皇聽之

○弟媛一度ハ多ク終ひし頃姉君ヲ讓リて再度御婚ありて源
氏物語の宇治宮に御女子ハ此と模寫して御姉妹互に取替りたるも
のちり猶此一段の更ハ千村仲雄主の泳宮考に委説あるを記す
三代實錄卷第三に清和天皇貞觀元年八月十日尚侍從三位當麻真人浦

虫薨時年八十浦虫者右京人也父正六位上繼麻呂云浦虫爲人貞和早標
美譽未嘗適於人遂不知伉儷之道自掌宮人之職脩禁內之禮式
大和物語百州八段に故御息所の御姉おのり子よ何よりみひらふなん甚らう
らう〜歌よこみよ更も弟人ら御息所より勝てなまのいよびのを
ける若ま時よ女親ハ云みひらと繼母乃手よ在りけまむ心う物お
不叶ぬ時も有りりさそよみらまひらふ
在るてぬいのちまの間の程むより憂事まむなげのいよびもが那とな
まよるるうらる梅花を折く又
かゝる香は秋もかゝるはるのいよびも春戀してよぬのをまのしやと
讀みくりけふ甚よしげまむの〜在りけまむよびよ人も甚多の

さらばど返更もせむらひけと女と云も終りかゝるもいふべし
阿比時ハ返更もせむらひ親も繼母も云けしバせめりてかくな
ま云やうけし

おめいもかひなつて忍びははまなつて人のこころま
むらう云やう物も不云りか云はふ心ぞを親も男婚む
云はれど一生に男をせむらひと云はれよむらひ云けりさ
けしもさむらひ男もせむらひ九むらひせむらひ

○此御息所誰とも知ざれば其御姊も考べきよしなし

○月おこやこ

起世經いそく佛告比丘月天子宮殿綴横正等四十九申旬四面垣墻七

寶所成月天宮殿純以天銀天青瑠璃而相間錯二分天銀清淨無垢光甚明
曜餘一分天青瑠璃亦甚清淨表裏映徹光明遠照亦爲五風攝持而行亦云
於此月殿亦有天蓋青瑠璃成輦高十六申旬廣八申旬月天子身與諸天女
住此輦中以天種五欲功德和合受樂隨意而行月天子身壽五百歲子孫
相承皆於彼治

龍城録云々開元六年上與申天師道士鴻都客八月望日夜因天師作術
二人同在雲上游月中過一太門在玉光中飛浮宮殿往來無定寒氣逼人露
濡衣袖皆濕頃見一大宮府榜曰廣寒清虛之府其守門兵衛甚嚴白刃粲然望
之如凝雪時三人皆止其下不得入天師引上臺起躍身如在烟霧中下視玉
城崔我但聞清香藹藹下若萬里瑠璃之田其間見有仙人道士乘雲駕鶴往

來若遊戲少焉步向前覺翠色冷光相射目眩極寒不可進下見有素娥十餘人皆皓衣乘白鸞往來舞笑於廣陵大桂樹之下又聽樂音嘈雜亦甚清麗上皇素解音律熟覽而意已傳頃天師亟欲歸三人下若旋風忽悟若醉夢中迴余次夜上皇欲再求往天師但笑謝而不允上皇因想素娥風中飛舞袖被編律成音製霓裳羽衣舞曲自古洎今清麗無復加於是矣

○ 天の羽衣

坂士佛の康永元年大神宮參詣記に外宮御鎮座の事と記し次右一首奉讚外宮天照豐天神歌也と左に記する長歌あり次豊の下受字とありやう

反歌 一本短歌

處女子之友介別而天原振籬津久流昔悲聞第四句誤字有べし一首の意解とべし

右一首奉題豐宇賀能賣神歌也

むろし丹波國ある川邊に天女八人降り水を浴び遊ぐり一人の老翁是を見く數多の天女の中に一人衣を取かくて天女是を騒ぐ皆飛去ぬ衣を隠し居る天女歎く衣をくふ翁は云く我の子なし願は此國に留る我子に成れしとく更に衣を返さば天女力及んで翁の子となりぬ養父の家は貧しき妻を隣り酒を造り賣り此酒を一椀を服せば百病悉く痊是に依り諸の宝を馬車に積り送る程に富貴の家と成りけり其後翁天女を厭心何れも思はず翁に向ひ其意を問ふ程に翁隱まなく申けり天女是を恨み天上に昇らんとす翁は天の羽衣を別く飛行の徳を失ふ下界に住すとす翁は養育の翁を厭きて起居は處ち常に蒼天

を仰ども伴ちひし處女を見えび泣く白屋子臥とも憐む人稀なり昔を
恐ひ今を悲く讀むよひくふ

天原振離見者霞多地家路麻余伊豆行敗不知聞迷の伊字假字 格ふがつと

此天女え神明御座の時御供申て丹波國より當國へ遷りたり天女は
泣居つる所と奈久郡トイリ

○此記凡く古代をとりて古書に違つる更多し此故事外宮儀式帳
にも不見これ本ハ何の書子出するのとりて次子引く搜神記
に甚能似るる更なり

搜神記に豫章新喻縣男子見田中有六七女皆衣毛衣不知是鳥人匍匐往
得一女死其解毛衣取藏之即往就諸鳥諸鳥各飛去一鳥獨不得去男子取

以為婦生三女其母後使女問父知衣在積稻下得之衣而飛去後復以迎三
女女亦飛去ト抄

○天に升るる

靈異記 上巻第 十三條 大和國宇太郡涼部里有風流女是即彼部内涼部造麻呂
之妾也天季風聲為行自性塩醬存心七子產生極窮无食无便為衣綴藤日
沐浴潔身著綴每於野採菜為事常住於家淨家為心採調盛唱子端坐含
咲馴言致食常以是行為身心業彼氣調恰如天上客是難波長柄豊削宮時
甲寅年其風流事神仙感應春野採菜食於仙草而飛於天誠知不修佛法而
好風流仙菓感應如精進女問經云居住俗家端心掃庭得五功德者其斯謂
之矣

○上より引ける藤原史公の遊吉野とある詩は漆姫控鶴舉とあるハ
此故更なるはしし此傳よりハ雀の更なるは終る彼詩を考はハ雀を乗て
天子昇し傳も有けまろし○猶加茂大神ある搜神記の鳥女なども
おれひ合はざし

○今昔物語に載るる此物語 并 諸書に異説

今ハ昔。○天皇ノ御代ニ一人ノ翁有ケリ竹ヲ取テ籠ヲ造テ要ズル人
ニアタヘテ其功ヲ取テ世ヲ渡ケルニ翁籠ヲ造ラシガタノニ篁ニユ
キ竹ヲ切ケルニ篁ノ中ニ一ノ光アリ其竹ノ中ニ三寸ばかりナル人ア
リ翁是ヲ見テ思ハク我年來竹取ツルニ今カ、ル物ヲ見付タルヲヨ
ロコビテ片手ニハ其小人ヲ取片手ニハ竹ヲ荷ウテ家ニ歸テ妻ノ姫ニ

篁ノ中ニテ此女子ヲコソ見付タレト云ケレバ姫モ悦テ初ハ籠ニ入テ
養ケルニ三月ばかりヤシナヒケリ例ノ人ニナリ又其子ヤウク長大ス
ルマ、二世ニナラビナク端正ニシテ此世ノ人トモ覺ザリケレハ翁姫
イヨク是ヲカナシミ愛シテ傳ケル間ニ此世ニ聞エタカク成ニケリ而
間翁亦竹ヲ取ランガ為ニ篁ニ行ヌ竹ヲ取ニ其度ハ竹ノ中ニ金ヲ見付
タリ翁コレヲ取テ家ニ歸ヌ然レバ翁忽ニ豊ニ成ヌ居所ニ宮殿樓閣ヲ
造テ其レニ住ミ種々ノ財庫舎ニ充テ満テリ眷屬衆多ニ成ヌ亦此兒ヲ
儲テヨリ後ハ事ニ觸レテ思様ナリ然レバ弥ヨ愛シ傳クテ無限シ而ル
間其時ノ上陸部殿上人消息ヲ遣テ假借シケルニ女更ニ不聞ケレバ皆
心ヲ盡シテ云セケルニ女初ニハ空ナル雷ヲ捕ヘテ將來レ其時ニ會ハ

ムト云ケリ次ニハ優曇華ト云花有ケリ其レヲ取テ持來レ然ラム時ニ
會ハハト云ケリ後ニハ不打ヌニ鳴ル鼓ト云物アリ其レヲ取テ得サセ
タラン折ニ自ラ聞エムナド云ウテ不^ア會ザリケレバ假借スル人々女ノ
狀形ノ世ニ不^ニ似微妙ナリケルニ^ズ耽テ只此ク云ニ隨テ難堪キ事ナレド
モ旧ク物知タル人等ニ可^{モトム}求キ更ヲ問ヒ聞テ或ハ家ヲ出テ海邊ニ行或
ハ世ヲ捨テ山ノ中ニ入り此様ニシテ求ケル程ニ或ハ命ヲ亡シ或ハ不^カ
返來又輩モ有ケリ而ル間天皇此女ノ有様ヲ聞シ食シテ此女世ニ並無^{ヘリコ}
ク微妙シト聞我レ行テ見テ實ニ端正ノ姿ナラバ速ニ后トセムト思シ
テ忽ニ大臣百官ヲ引將テ彼翁ノ家ニ行幸アリケリ既ニ御マシ着タル
ニ家ノ有様微妙ナルヲ王ノ宮ニ不^{コトナラ}異ズ女ヲ召出ルニ即參レリ天皇此

レヲ見給ニ實ニ世ニ可^{タトフキモノ}譬者無ク微妙ナリケレバ此我が后ト成ラムト
テ人ニハ不^{チカツカ}近^カ付ザリケルナメリト喜ク思シ食テヤガテ具シテ宮ニ返^{カウ}
テ后ニ立^タテムト宣フニ女申サク我レ后トナラムニ無限キ喜ビ也トイ
ヘ^ビ氏^{オシ}實ニハ已人ニハ非^{アラ}又身ニテ候也ト天皇宣ク汝子然ラバ何者ゾ鬼
カ神カト女ノ云ク已鬼ニモアラズ神ニモ非ズ但シ已ヲハ只今空ヨリ
人來テ可^{ムカフベ}迎キ也天皇速ニ返ラセ給ヒ子ト天皇此レヲ聞給テ此ハ何^{イカ}
云事ニカ有ラム只今空ヨリ人來テ可^レ迎ニ非ズ此レハ只我が云更ヲ辞^チ
ビムトテ云ナメリト思給ケル程ニ暫許有テ空ヨリ多ノ人來テ輿ヲ持
來テ此女ヲ乗セテ空ニ昇ニケリ其迎ニ來レル人ノ姿此世ノ人ニ不^ニ似^ガ
リケリ其時ニ天皇實ニ此女ハ只人ニハ無キ者ニコソ有ケレト思シテ

宮ニ返リ給ニケリ其後ハ天皇彼女ヲ見給ケルニ實ニ世ニ不似形有様
微妙ナリケレバ常ニ思シ出テ破無ク思シケレドモ更ニ甲斐無クテ止
ニケリ其女遂ニ何者ト知更無シ亦翁ノ子ニ成ル更モ何ナル更ニカ有
ケム惣テ不心得又事也トナム世ノ人思ケル此ル希有ノ更ナレバ此ク
語り傳タルト也

○右の物語大のゝ同きものゝ異なる處すくなく
此書いよゝ元本
と不見抄み引
ると写つ書ぎよも大方其終なきほど
假字多く続けぬ処もどハ改もしつ
○女始ニハ空ナル雷ヲ捕ヘテ
将来レ云ハ靈異記上巻第一條子小部栖輕者泊瀬朝倉官并三季治天
下雄畧天皇謂大泊瀬
推武天皇之隨身肺脯侍者矣天皇磐余宮之時天皇與后
寐大安殿婚合之時栖輕不知而参入也天皇耻輟當於時而空雷鳴即

天皇勅栖輕而詔汝鳴雷奉請之耶答曰將請天皇詔曰尔汝奉請栖輕
奉勅從宮罷出緋纒著額擎赤幡梓乘馬從阿部山田之道与豊浦寺之
路立往至于輕諸越之衢躡請言天鳴雷神天皇奉請呼云云然而自此
還馬立言雖雷神而何所不聞天皇之請耶立罷時豊浦寺与飯間間鳴
雷落在栖輕見之即呼神司人入饗籠而持向於大宮奏天皇言雷神奉
請時雷放光明炫天皇見之恐偉進幣帛令還落處其落處今呼雷岬在古
京小治田宮者然後栖輕卒也天皇勅留七日七夜詠彼忠信雷落同處作彼墓
收立碑文柱言取雷栖輕之墓也此雷惡念而鳴落踊踐於碑文柱彼之
折間雷攝所捕天皇聞之放雷不死慌七日七夜留在天皇勅使樹碑文
柱標言生之死之捕雷栖輕之墓謂古京時名為雷岬語本是也と有り

此更雄略紀云、七年秋七月丙子天皇詔少子部連螺羸曰朕欲見三諸岳神之形汝齊力過人自行捉來螺羸答曰試往捉之乃登三諸岳捉取大蛇奉示天皇天皇不齋戒暫見之其雷虺虺目精赫赫天皇畏蔽目不見却入殿中使放於岳仍改賜名爲雷すのり暫見之の三字畧記は後補と云くふり○優曇華は更ハ玉枝の段よひまき○不打又ニ鳴ル鼓ト云物ハ法花經妙音菩薩品よ百千天樂不鼓自鳴すのり觀无量壽經六觀有無量諸天作天伎樂又有樂器懸處虛空如天寶幢不鼓自鳴

詞林採葉抄云、いづく古老傳曰此山麓垂馬里有老翁愛鷹孃飼犬後作箕為業竹節間得少女容貌端嚴光明照耀爰桓武天皇御宇延曆之比諸國下宣旨被撰美女坂上田邑麻呂為東國勅使富山裾老翁宅宿終夜不絕火

光問子細是養女光明也云田邑麻呂即上洛奏更之由於是少女登般若山入巖岨畢帝幸老翁宅翁奏由緒帝悲泣脫帝玉冠留此處登頂上臨金岨少女出向微笑曰願帝留此帝即入岨訖玉冠成石在干今彼翁者愛鷹明神也孃者飼犬明神也已上今考之云當山縁起之上者仰雖可信用之時代甚不審也疑若天智天皇欽彼帝近江宮ニテ崩玉フトイヘ氏實ハ不然白地ニ御馬ニ名テ出マシテ隱玉フ所ヲシラス宇治山ノ麓ニ御鞋片落コレヲ取テ山陵ニ籠タテマツル鞋石トテ長三尺許有之富士金岨へ入玉フハ此帝欽可詳鴨長明巡歷記云取要此山ノ傍ニ採竹翁ト云者アリ宅後ノ竹林ニシテ鶯ノ卵子ヲ得タリ養テ子トス少女トナリテ身ノカタハラヲテラス百媚アリ見人斷腸聞者心ヲ動ス是ヨリシテ青竹ノ中ニ黃金出

来テ貧翁忽ニ富人トナリニケリ英華ノ家好色ノ道月卿爭光雲客重光
艶言ヲツクリ戀懷ヲ抽ヅ時ノ帝戲聞ニオヨビテ御狩遊ノ由ニテ姫ノ
竹亭へ幸アリテ鴛ノ契ヲムスビ松ノ齡ヲヒキ玉フ竹姫後日ヲ契リ申
ケレハ帝空ク返玉フカタヘノ天是ヲシリテ飛車ヲ出シテ迎テ天ニ昇
リ又鶯姫帝ノ御契ノサスガニ覺テ不死ノ藥ニ歌ヲ書副テ留テケリ其
歌ニ云

今ハトテアマノ羽衣キル時ゾ君ヲアハレトオモヒイテヌル
帝御返歌

逢コトノ泪ニウカブ我身ニハシナヌ藥モナニカハセン

勅使智計ヲメグラシテ富士ノ嶺ニ登テ此藥ヲ燒アゲ、リト仍テ此山

ヲ不死山ト云ケルヲ郡ノ名ニ付テ富士ト申ケルナリ上と有と

○古老傳の説ハ此山とあるハ富士山なり是ハ此物語を附會して
桓武天皇ハ御妻と申なむなり○今考之と云ハ詞林採葉の説
なるべし疑若天智天皇欽と云ふもひびくことなる也云も更なり富
士の金嶺ヲ入ルハ此帝欽と云ふも由なる也更なり此天皇の崩御
し時の吏書紀ある方葉集なる歌も見えて明なるを也○鴨長明
の巡歴記の説ハ此物語を片端ひびく傳ふるを聞ゆるなるはし
大秀按ハ此物語ひろハ此書を見し暗記ソラめく語傳チ區チに
なるなりぬり已カつて幼ホし時山深き地トコロより出るる老人フルの今昔
物語なるカ談カらるとホ鬚ホヲカハカ此老人ハ一文不通者フルめて古

く聞傳ふると談ける中子宇治拾遺なる鬼子瘤とて終つるもあまよ
又雀の子やしなひく徳得しハ今も女童の語まると聞つ長明也此
本ハ未見で談傳ふると聞つふのこなるべし

國名風土記よしく甲斐國トハ昔ハ富士山ノ麓ニ竹取ノ翁トテ竹ヲ
種テアキナヒケル者アリ彼翁園生ノ竹林ニシテ鶯ノ卵ヲ見付タリ暖
メ置ク其後程ヲヘテ是ヲミレバ容顏優ナル寵姫ト成ケリ然ルニ彼ヲ
養子トスタケシ後ニカノ翁ガ田作ケル時ニ暇ナカリシカバ養母ノ訟
ヘテイハク隙ナキ時ニシモ何トカヤ手助トナリ玉ハザルト情ナク云
ケレバ鶯姫コレニ怒ヲナシテ富士山ノ峯ニ登テ岩ヲ蹴破テ湯ヲ支ラ
カシ田ツクル人ノ死ミナ焼石トナル件ノ祖父母ハニゲテ白根ガ峯ヘ

ユキ又彼田カケル馬モニゲテ信州駒ガミ子ニスミケル其駒主ヲワス
レズ常ニ馴シカバ彼馬ヲ心ニ入テ飼シユエナリ此所ヲ飼國ト云然ヲ
カナガキニ甲斐トカクナリ黒駒ト云モ甲斐國ヨリイヅルナリ

○これ國名風土記と云ふはハ大いなるいふなりまよ言説あり取りも
ふいぬ物なり 文龜年中子姊小路基綱中納言の書けつる物に此記
の飛騨國の条を引けしハ其よりハ古き文なり
此説ハ古老傳とていふ偽きしもの歟

○ 不死藥

本草和名第十六卷よ

不死藥	汁一種	黃玉芝	<small>黃蓋三重</small>	海中紫菜	<small>欬生石上</small>	人威芝	<small>如人赤色</small>	天精芝
<small>青蓋</small>	伏苓芝	<small>狀如牛角</small>	牛精芝	<small>青蓋青蓋</small>	不死芝	<small>青蓋四支</small>	銅芝	<small>蓋如甑色黃赤</small>

海石榴油 在海嶋中 似安石榴 赤松芝 状如人 色赤 金神芝 白蓋 黑蓋 夏精芝 方蓋 三子

石决明 附石生 海中 黑土芝 黑玉蓋 五重蓋 木精芝 赤光 青蓋 白玉芝 白蓋 白蓋

科玄丹芝 赤玉文 黄蓋 火蓋芝 赤蓋 黑蓋 鳥父芝 赤蓋 玉蓋 銀末 生大隄 之英 土

神芝 黄蓋 黑裏 蕨瓦是等 日月所光 処無不生 但人所不審 耳已上 升一名出 崔禹

○猶不死藥の叟本文に註し見えり

文政十一年歲次戊子三月功畢

田中大秀著併書

山崎弘泰 同校
長瀬俊香

竹取翁物語解卷首

